

咸鏡南道の無文土器：北部朝鮮無文土器編年のために(2)

西谷，正

<https://doi.org/10.15017/2233869>

出版情報：史淵. 119, pp.165-189, 1982-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



咸鏡南道の無文土器

―北部朝鮮無文土器編年のために(2)―

西谷 正

一 はじめに

一九四五年以後、朝鮮考古学の諸分野において、めざましい発達を成し遂げてきたことは周知のとおりである。そのなかにあつて、未解決の問題点も明らかにしたが、そのうちの一つに、無文土器の詳細な編年作業がある。とりわけ、地域ごとの無文土器編年の試行錯誤の蓄積が、いまもつとも必要と考える。筆者はすでに、そのような作業に着手してきたが、本稿もその一環として位置づけられる。^①

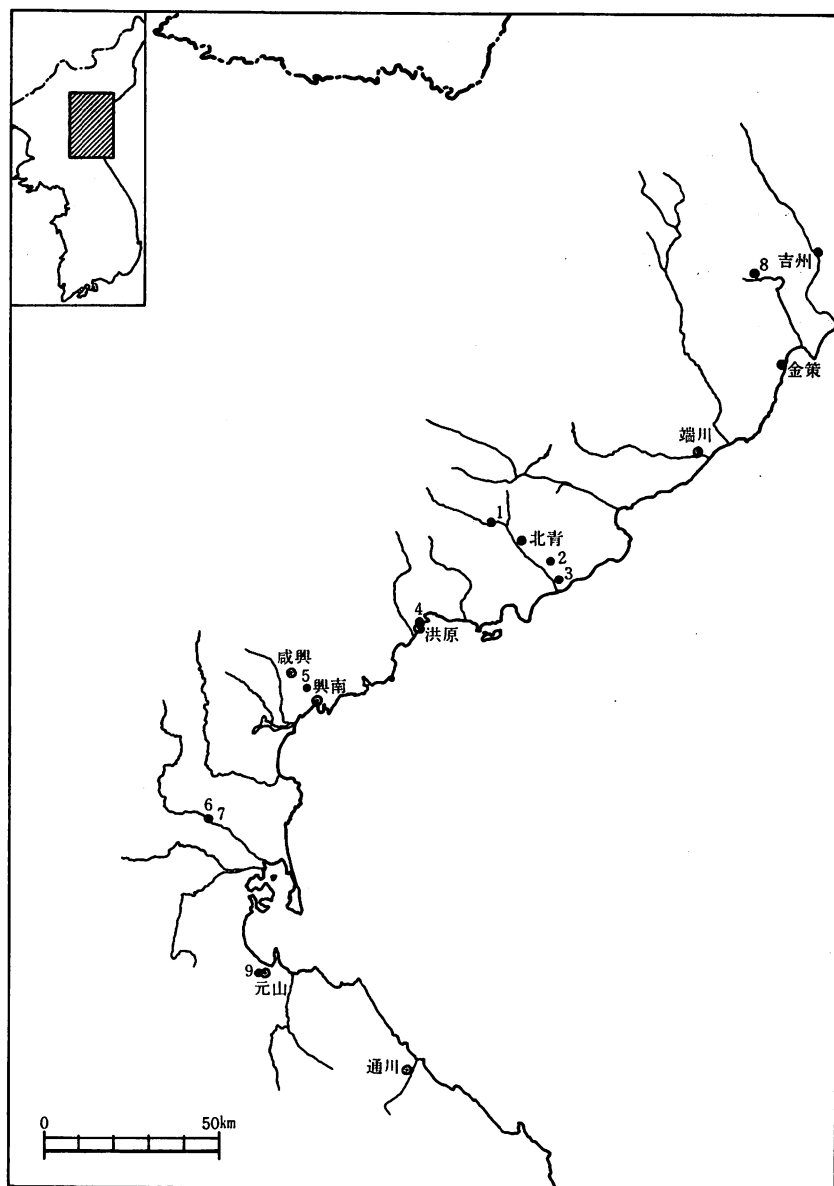
二 咸鏡南道の無文土器

咸鏡南道の無文土器に関する資料は、けつして多くなく、無文土器時代の遺跡の調査も少ない。これまでに公表されている無文土器出土地は、北から南へ列举するとわずかにつぎのとおりである。

北青郡中里^②(第一図1)

新昌郡上里^③(第一図2)

咸鏡南道の無文土器(西谷)



第1図 咸鏡南道無文土器出土地分布図

新昌郡土城里（第一図3）

洪原郡雲浦労働者区（第一図4）

咸興市興南区域湖上洞（第一図5）

永興郡永興邑（第一図6）

永興郡龍江里（第一図7）

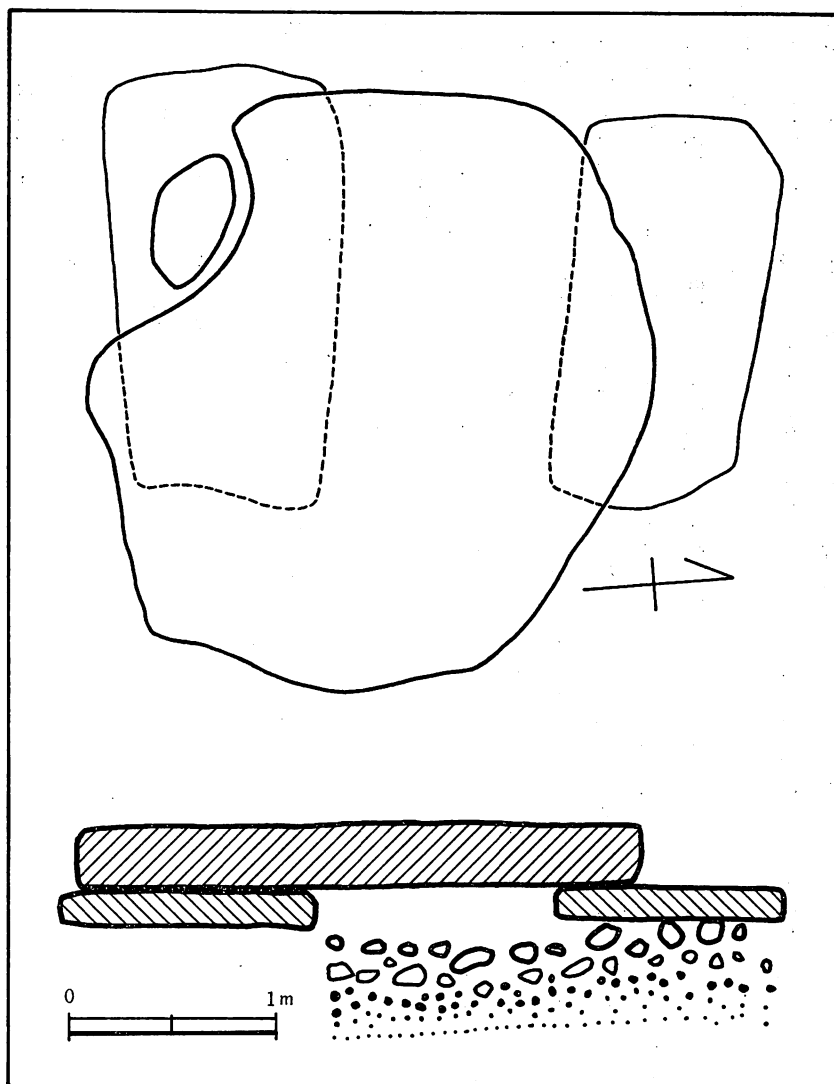
しかも、無文土器編年作業に供しうる資料はきわめて限られている。そこで、本稿では、行政区域としては咸鏡北道に属しているが、内容的には咸鏡南道と共通点の多い、金策市徳仁里遺跡^⑧（第一図8）出土の無文土器を北方の例として参考にする。また、現在は、江原北道に属しているが、旧咸鏡南道にあたる、元山市中坪洞遺跡（第一図9）出土の無文土器も南方の例として取りあげる。

(1) 咸鏡北道金策市徳仁里遺跡出土の無文土器^⑩

徳仁里遺跡は、一九五九年秋に実施された踏査時に注意され、翌一九六〇年一月八日・九日の両日、清津博物館によって発掘された支石墓群である。支石墓群は、徳仁里のチョンジャンに位置する。そこは、院坪駅で下車して、臨溟川をさかのぼって約八キロ上流の谷間にあたるが、平潤な水田地帯の真ん中に支石墓群がみられる。

徳仁里をさらにさかのぼり、徳満里の西側にそびえる徳満山を越えて、北大川の溪谷に入っている道は、古来、海岸側の磨天嶺のような険悪な山塊を避けて、河川ルートで、咸鏡北道吉州と咸鏡南道広泉・端川を連結させる主要交通路であった。徳仁里支石墓群は、咸鏡南道一帯の支石墓が、おそらくそのような交通路に沿って、磨天嶺以北に越えてきた例として重要である。

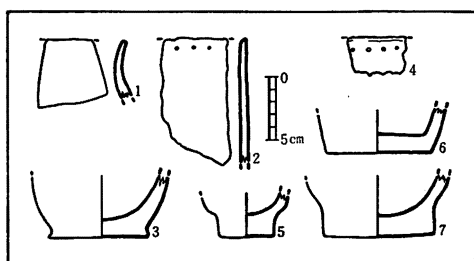
さて、徳仁里の支石墓群は、もともと六基ほどあって、東西方向にはほぼ一直線上に一〇〇～一五〇メートルの間隔をおいて並らんでいたようである。そのうち、二基は地元民の証言によって、かつて存在したことがわかる程度であ



第2図 徳仁里支石墓

り、また、もう二基は完全に破壊されて、その痕跡をとどめるにすぎないものである。けっきょく二基だけが支石墓群の中間にあつて、約一四〇メートルの間隔をおいて、不完全ながら現存しているだけで、それらが発掘されたわけである。

最初に発掘された第一号支石墓から無文土器が出土している。第一号支石墓(第二図)は、典型的なテーブル型であるが、北側から南側に倒壊した状態にある。支石は、ほぼ東西に長軸をおく二枚の板石を平行に立て、その内側の東・西に小口石を立てていたらしい。南側支石は、長さ二・四メートル、高さ一・二メートル、厚さ〇・一三メートル、北側支石は、長さ一・九メートル、高さ一・四メートル、厚さ〇・一三メートルの板石であり、その上に長さ三

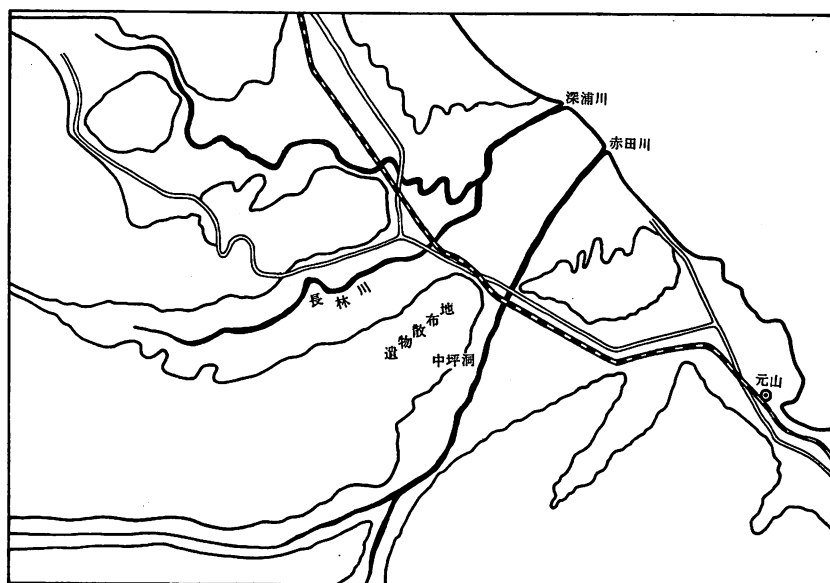


第3図 徳仁里(1~3)・中坪洞(4~7)
出土の無文土器(縮尺 $\frac{1}{2}$)

メートル、幅二・七メートル、厚さ〇・三メートルの蓋石が載っていたようである。支石で囲まれた内部は、深さ約二〇センチほどのところは、直径一〇〜一五センチの石と土が混じり、その下に、直径五センチほどの礫が、幅約二メートル、厚さ二五〜三〇センチにわたって整然と敷かれていた。これら二つの層位の間から、無文土器や人骨の破片が出土した。

無文土器は、すべて褐色系統のものとされるが、壺と甕が含まれる。壺(第三図1)は、口縁部の破片で大きく外反する。甕(同2)は、やはり口縁部の破片であつて、直立する。口縁端から少し下がったところに、直径二〜三ミリの貫通した円孔を、一・一五センチ間隔でめぐらしている。底部(同3)は、平底であつて、周縁が突出している点の特長である。胎土には、太い砂粒を含み、厚くて粗野な感じを与える。

(2) 江原北道元山市中坪洞遺跡出土の無文土器^⑤

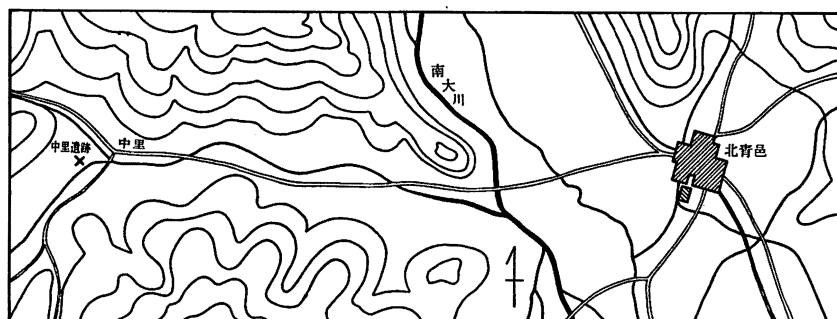


第4図 中坪洞遺跡の位置

もと咸鏡南道元山市湧珠里と呼ばれた中坪洞遺跡は、元山第三中学校が一九五三年から歴史教育の一環として行なってきた、原始の遺跡調査の過程で発見されたものである。

中坪洞遺跡は、西方に馬息嶺の低丘陵を望み、龍溪里の背後から約五キロにわたって伸びてくる低丘陵の東端付近に位置する。この丘陵の前面には徳源平野がひろがるが、そこには深浦川と赤田川の二つの川が東海（日本海）に注いでいる。いま述べたように、元山市街地の西方にあたる徳源平野の北側には、深浦川が、また、南側には赤田川が流れている。そして、徳源平野の西側には、二つの広大な丘陵が東方に向けて突出している。そのうち、南側の丘陵は深浦川の支流である長林川と赤田川の間に挟まれているが、この丘陵の西南側の傾斜面に赤田里が所在する。中坪洞遺跡は、洞の背後の丘陵一帯を包括し、そこに多数の土器片や石器が散布している（第四図）。

この付近で採集された土器には、櫛目文土器、無文土器、灰色土器、黒色土器などが含まれる。櫛目文土器に



第5図 中里遺跡の位置

ついで多いのが無文土器である。無文土器は、砂混じりの胎土をもつ、おそらく褐色系統のものと推測される。そのうちの一例（第三図4）は、口縁部の破片であるが、内面に一センチ間隔に直径五ミリの円孔をめぐらしているといわれる。いわゆる突瘤文にあたるものであろうか。底部（第三図5・7）は、直径五センチ未満のきわめて小さいものと、それよりは少し広い平底をなしたものがみられる。ともに、底部に接する胴部の器壁が顕著に焼成されていることが特長といわれる。

(3) 咸鏡南道北青郡中里遺跡出土の無文土器^④

中里遺跡は、一九六五年五月初旬に、協同農場で削土工事を行なった際、偶然に発見された。通報を受けた咸興博物館は、ただちに現地を踏査し、遺物が出土したところが住居跡であることを確認した。そして、同年六月と一〇月の二回にわたって発掘調査されたが、調査面積はごく小範囲であった。

遺跡は、北青邑から西方に六キロ離れた中里のサイにある。サイの集落は、その西北側から東側にかけて低く伸びた低丘陵の前面で、傾斜角五度ほどの平地と変わらないところにある。サイ集落の東・南両端には小川が流れるが、その川底は深さが三メートルほどのところにある。遺跡地は、この集落の西南端にある（第五図）。

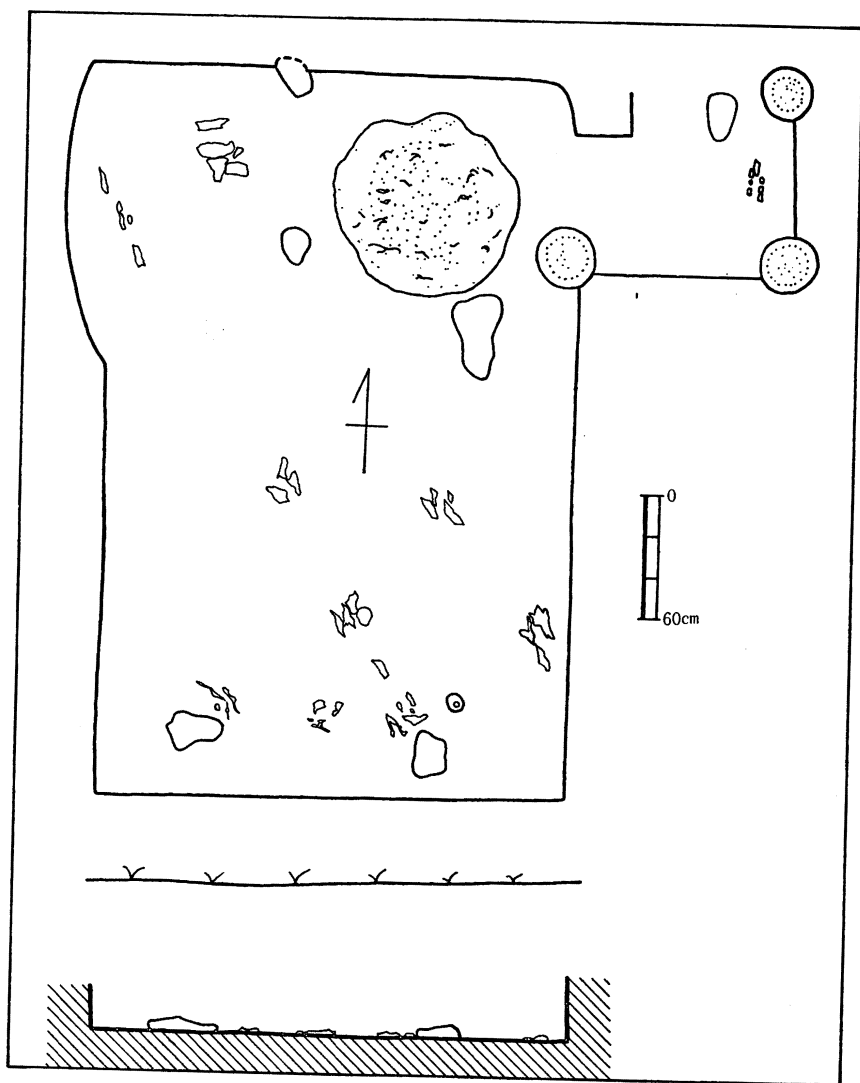
調査区は、三区に分けられる。第一区は、一九六五年六月の削土工事の際に露呈した、残余の部分で、約三六平方メートルが発掘された。第二区は、そこ

から東方に八メートル離れたところで、同年一〇月に調査された。そこでは、削土工事時に露われた断面から南北に三メートルの間を取って断面部分から発掘されはじめ、その面積は一・二二平方メートルに及んだ。第二区の東側で住居跡の肩線がみつかったため、その東方に四五平方メートル拡張され、第三区とされた。

遺物包含層は、第二区の北側だけは中・近世の土器や鉄器が混入していたが、そのほかはほとんど攪乱されない状態であった。層位はおよそ単純で、最上層が厚さ約二〇～二五センチの腐蝕土層で耕作土でもある。その下の第二層は、厚さ二〇～三〇センチの黒色砂質土層で、ここに遺物が包含されている。さらにその下の第三層は厚さ二〇センチ内外の黄色砂質土層であり、最下層は厚さ一メートルほどの白色砂層で地山となっている。

第一区からは、住居跡二基がみつかり、北から一号・二号とされた。一号住居跡は、深くまで耕作されていて、本来の深さはわからないが、輪郭ははっきりしている。もとは平面が長方形もしくは正方形であつたらしいが、切断されて西側の角しが残っていない。その部分の壁線の長さは南北が一メートル、東西が一・五メートルである。住居跡の内部から、褐色土器・黒色土器・底部などの無文土器と、石斧・石庖丁・石鏃などの磨製石器が発見された。これらは、削土時に発見された遺物と同じものである。住居跡の底面は、火を受けており、その厚さが五～七センチで、柱穴はみられない。底面には木材が焼けて炭と灰になって一面にひろがっていた。二号住居跡は、一号住居跡の西南方に四・二メートル離れていたが、一号住居跡と同様に、深さがわからなかったが、輪郭ははっきりしていた。住居跡の西側は切断されてすでになく、東北側の角だけが残っていた。残存した壁面の長さは、東西が〇・八メートル、南北が一・七メートルである。住居跡の深さは現状では三〇センチを測る。出土遺物には、褐色土器、黒色土器の破片がそれぞれ数点ずつと、加工痕のある石英石破片がある。二号住居跡でも火を受けた底面に木材が焼けて炭と灰になっていた。

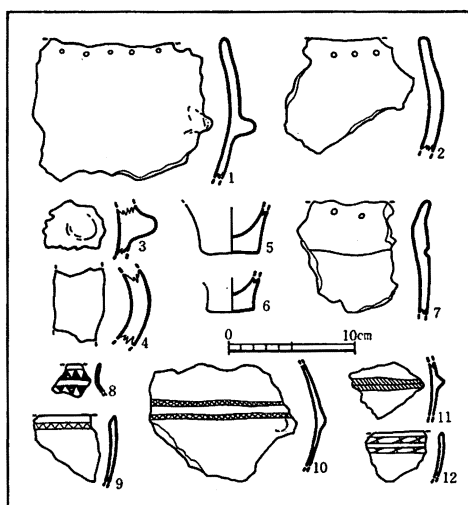
第二区の北側は、前述のとおり、遺物包含層が浅い関係で、削土時に深く攪乱されていたが、包含層の下部分は



第6図 中里遺跡第3号住居跡

比較的よく残っていた。そこからは、褐色・赤褐色土器と黒色土器の破片と、石庖丁・石鏃などが出土した。第二区の南側は、包含層がよく保存されていた。北側と同じような遺物や柱状挟入石斧・紡錘車が出土した。ただ、第二区では住居跡はみつかっていない。

第三区は南北一四メートル、東西三メートルの範囲で発掘されたところ、この発掘区の北端で住居跡の輪郭の一部が検出されたので、そこを中心に四五平方メートルを拡張し、三号住居跡（第六図）として発掘された。このほかに、別の住居跡の輪郭の一部が確認された。この発掘区の南側に寄ったところで、直径二六センチほどの粘土塊と炭・灰が認められたが、そのまま保存された。三号住居跡の西南角から南側に三〇センチ離れて、別の住居跡の輪郭が現われ、また、そこから二〇センチ南側に別の住居跡の輪郭が認められた。ともに、三号住居跡と同じ深さで輪郭が



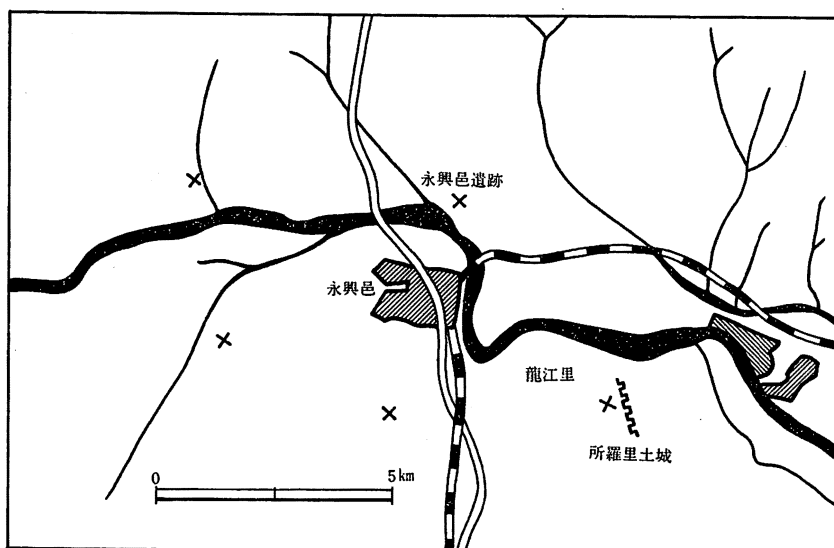
第7図 中里出土の無文土器（縮尺1/6）

現われた。もっとも南側の住居跡輪郭内からは、後述のような、三号住居跡にあるものと同じ状態の粘土が三〇センチの間隔をおいて二カ所でその上面がみつかった。輪郭の外では鉄の破片一点が検出された。^⑧

さて、中里遺跡出土の無文土器は、胎土によって大きく二種類に分類される。第一に、いわゆる褐色あるいは赤褐色の無文土器の甕である。胎土は、粘土に砂を混じえたもので、巻上げによって整形しているが、粗い感じを受ける。口縁端は、まっすぐ終っているが、口縁端近く、もしくは、そこより少し下がったところに、円孔を貫ぬき一周めぐらしている点に特色がある。前者の器壁は薄くて、後者のそれは厚い（第七図1・2）。

有孔列点文の下方には、突起把手がついており（第七図1）、おそらく二個一対あったものと思われる。一号住居跡および第二区一般文化層からは、乳首形把手に類似するが少し異なる把手（第七図3）と、縦に帯状把手をつけたもの（第七図4）がある。甕には、三号住居跡から出土した別の一種がある。すなわち、口縁端部を外方に折りまげて二重口縁とした上で、そこに有孔列点文をめぐらすものである（第七図7）。褐色あるいは赤褐色の無文土器の底部は、いずれも平底である。三号住居跡から出土した底部は、直径八センチ、厚さ三・二センチ（第七図6）、一号住居跡のそれは直径一一センチ、厚さ三・二センチを測る（第七図5）。

第二は、胎土に泥土を混じえた黒色土器の壺である。胎土に砂を含むものと、そうでないものがあるが、前者はひじょうに薄い（〇・三〓〇・四センチ）。これらはおよそきわめて小形のものである。若干広がつた口縁は頸部でいったん狭まり、さらにそこから胴部へと広がっていく形態のものがある（第七図8）。黒色土器には、口縁部や胴部に焼成後に彫られた、さまざまな線刻文で飾られる。そのうちの一例として、第二区一般文化層から柱状扶入石斧と伴出したものに、〇・六センチ間隔で二条の平行線を横に引き、そのなかに斜線で三角形文を表わしたもの（第七図9）と、さらにその三角形文のなかに数条の横線で埋めたもの（第七図8）がある。つぎに、二号住居跡の底面から出たものには、〇・六センチ間隔で上・下にそれぞれ二条の平行線を引き、そのなかに斜線を交叉させて網文様に彫ったもの（第七図10）がある。また、二号住居跡の出土品で、乳首形把手がついた胴部に粗く三条の平行線を横に引き、そのなかに平行斜線を引いたものがある（第七図11）。さらに、一号および三号住居跡から出土した破片には、〇・五センチの間隔をおいて二条ずつの平行線を横に引き、それぞれそのなかに斜め十字を切って三角形文を上・下につくり、そのなかを数条の縦線でうめるものがあり、まちがいなく表面を磨研している（第七図12）。黒色土器の底部はわからないが、台付鉢の脚部の破片が第一文化層で一点出土しているだけである。脚の現存高は四・五センチで、なかほどに楕円形に近い穴があいているものも一点ある。



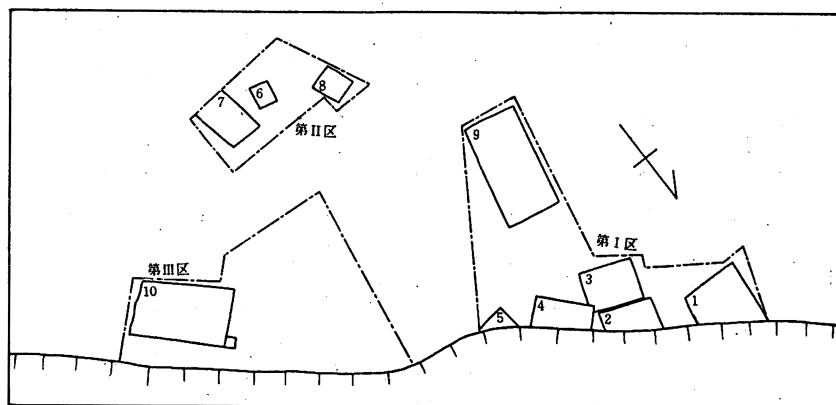
第8図 永興邑遺跡の位置

(4) 咸鏡南道永興邑遺跡出土の無文土器¹⁷⁾

永興邑遺跡は、河川の氾濫によって露呈され、周辺に遺物が散布するにいたって、遺跡の存在が知られるようになった。その後、何回かの分布調査を経て、一九六四年九月に発掘調査された。

遺跡は、永興駅から東北におよそ一キロ離れていて、西から東へ流れてくる龍興江が大きく南へ曲折するところの、河岸の畑地に立地する。遺跡の範囲は、長さ三五〇メートルに、幅一五〇メートルにわたっている（第八図）。

河岸の断面には、ところどころに火を受けた住居跡の炭と、黒色腐蝕土層が露出していた。龍興江の流れにしたがって下っていきながら、文化層がもっとも多く充満しているところに、一つのトレンチを設定し、およそ三〇〇平方メートルを発掘したが、そこを第一区とされた。第一区から東南に約一五メートル離れて、一三〇平方メートル余りの面積が発掘され、第二区とされた。そして、第一区から河の流れにしたがって約一〇メートル離れた河岸に、四〇〇平方メートルの範囲が発掘され、そこは第三区とされた（第九図）。



第9図 永興邑遺跡住居跡分布図

遺跡の一部では、古代の遺物が、深さ二〇～四〇センチ内外のところで出土することはあるが、こん回の調査で設定されたトレンチ発掘では、ただ一つの文化層が確認された。地表下一メートルほどは厚い砂層であるが、そのなかで最上層は二〇～三〇センチの純砂層で、その下には、粘土が若干混じる砂層が二〇センチ程度の厚さであり、さらにその下に、厚さ五〇～六〇センチほどの赤味を帯びた砂層が覆っている。砂層の下には、厚さ一五～二〇センチの文化層があるが、黒色の腐蝕土に炭と灰が混じっている。また、その下には、地山である白色砂層があり、その下の砂利層へとつながる。

第一区（第九図）の発掘区は、すでに河岸の断面に露出していた文化層を規準として、河岸に沿って長さ二八メートル、幅六メートルの範囲で行なわれた。西北側の端で、住居跡の半分がひっかかっていたので、およそ三〇平方メートルが拡張された。ここでは、全部で五基の住居跡がみつかったが、西北側のものから順を追って一号から五号までの住居跡番号がうたれている。そしてまた、第二区を発掘してから後に、トレンチの南側でもう一つの住居跡がみつき、これは九号住居跡とされた。

一号住居跡の輪郭は、地表下一メートルから検出されたが、洪水時に、住居跡の北側部分が破壊された。南北に長い堅穴式住居跡で、東西

の長さ六メートル、現存する南北の長さは八・七メートル、深さは〇・二メートル程度である。住居跡内には木材が焼けて炭となって広がっていた。西壁縁には、板材の炭化物があった。住居跡からは、東北の角付近で無文土器の底部、石庖丁、火を受けた獣骨、黒鉛塊などが出土した。

二号住居跡は、一号住居跡の東方約四メートルのところにあり、地表下一メートルで、住居跡の輪郭が現われた。やはり半分ほど切断された竪穴式住居跡として、完存する南壁の長さ七メートル、現存する西壁の長さは二・八メートル、深さ〇・二五メートル内外である。この住居跡には、火を受けた痕跡はなく、ただ、南壁縁の肩線付近で炭が出土しただけである。その炭は、三号住居跡が焼けて倒れるときに覆ったものであって、したがって、二号住居跡は三号住居跡より時間的に先行するものと思われる。住居跡の真ん中に、直径八〇センチほどの穴があり、そこには一〇センチの厚さで灰がつまっていた。炉跡であることはまちがいない。この住居跡からは、無文土器とともに、扁平片刃石斧、石錘、石刀、石庖丁、石槍、石鏃、鑄型破片などが出土した。

三号住居跡は、二号住居跡とほとんど同じ深さに三〇センチの間をおいていたが、東側の隅は、四号住居跡によって若干切られた。住居跡の平面形は長方形である。東側壁線の長さは四・六メートル、北側壁線の長さは六・四メートルで、深さは二五センチである。やはり住居跡は火災にあっており、炭が散布していたが、そのなかには焼けた柱根もあった。出土遺物には、無文土器と石槍、石斧などがある。

四号住居跡は、東北壁面の半分ほどが切られてみづかった。完存する西南壁の長さは六・九メートル、現存する東南壁の長さは四メートルほどで、深さは二五センチ内外である。住居跡の全面に火を受けてくづれ落ちた炭が覆っている。出土遺物には、無文土器と石槌、石錘などがある。

五号住居跡は、ほとんど四号住居跡と接してみづかったが、一つの角だけが残っていた。長さは南壁が二・八メートル、西壁が二・二メートル、深さは三〇センチ程度である。やはり火を受けた住居跡として、木材が焼けて一面

を覆っており、また、柱根が立ったままで焼けた痕跡がある。柱根の直径は一〇〇一五センチで、柱根間の距離は二〇〇八〇センチ内外である。

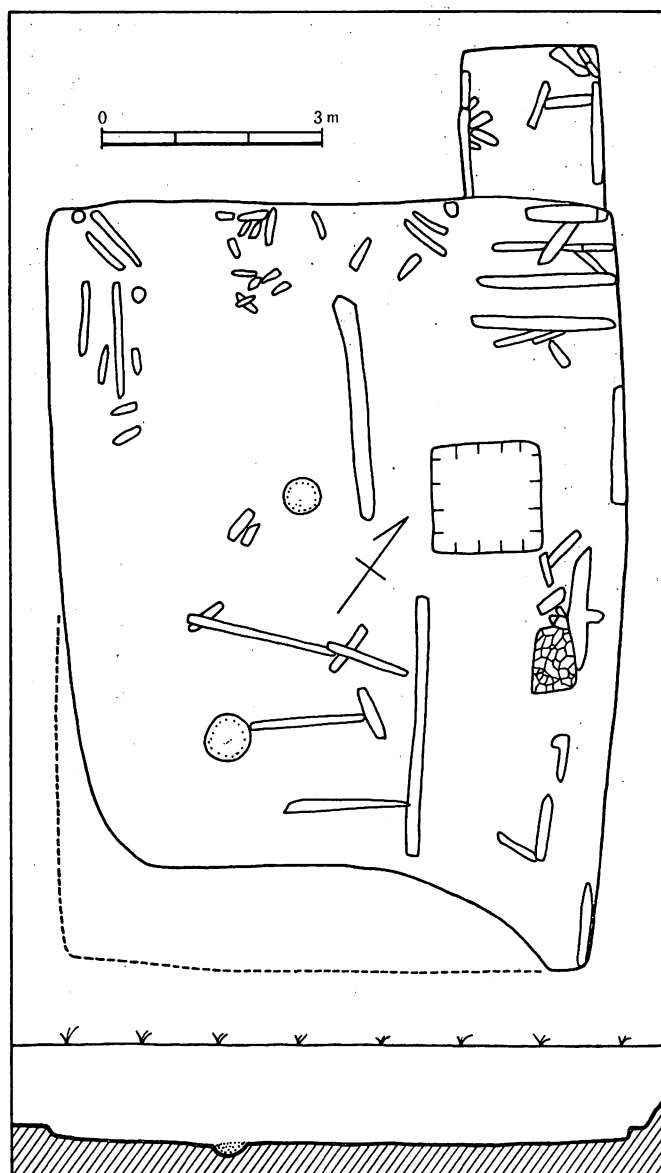
九号住居跡は、三号住居跡から南側に約八メートル離れて、地表下一・四メートルからみつかった。もっとも長い西壁の長さは一メートル、北壁の長さは六メートル、深さは三五センチ程度として、規模がはなだ大きい竪穴式住居である。やはり火を受けた住居跡として、底面のところどころに炭と灰が覆っているが、その状況からみて切妻形の屋根がくづれ落ちたようである。住居跡の底面のところどころには、灰色粘土が敷かれていた。出土遺物には、無文土器や石庖丁、石鏃、砥石などがある。とりわけ石鏃は、住居跡の北側隅で一〇個あまりがまとまって出土したり、南側の角の付近で剣把頭飾が出土したのは注目される。

第二区(第九図)では、南北八メートル、東西一四メートルの区画を定めて発掘する途中で、トレンチの西北隅で住居跡の輪郭が「形に認められたので、二〇平方メートル余りをさらに延長した。ここでは全部で三基の住居跡が調査された。

六号住居跡の輪郭は、地表下六〇センチでみつかった。長さは東壁で二・六メートル、南壁で二メートル、深さは二〇センチ程度である。規模はきわめて小さいが、平安北道寧辺郡細竹里遺跡でも類例がある^⑩。住居跡の底面は若干堅く整え、遺物には土器片が数点出土しただけである。

七号住居跡は、六号住居跡から東側に約一・六メートル離れたところでみつかった。住居跡の南側部分は、少し切られて出たが、現存する南北の長さは五メートル、完存する東西の長さは三・五メートル、深さは三〇〇三五センチほどである。出土遺物は、土器片のほか、石斧、石鏃、石庖丁、砥石作業台などである。

八号住居跡は、六号住居跡から四メートルほど離れた、第二区の西北角付近から検出された。長さは東南壁で三メートル、西南壁で三・二メートル、深さ二〇センチ程度のほとんど方形の住居跡である。この住居跡では、肩線付近



第10図 永興邑遺跡第10号住居跡

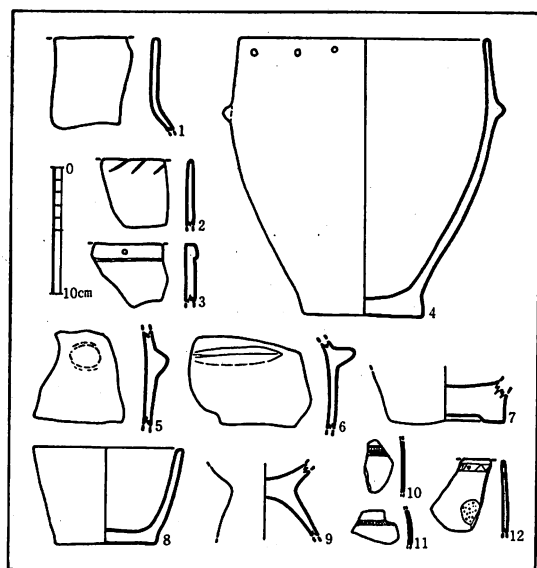
から出たいくつかの土器破片のほかには、何ら遺物をみいだすことはできなかった。第二区の住居跡はすべて規模が比較的小さく、火に焼けた痕跡がない。

第三区（第九図）は、第一区の東側の河の縁にある。東南側で一〇号住居跡が調査された（第一〇図）。ほとんど

地表面に露呈した輪郭を端緒に発掘された(第九図)。一〇号住居跡の上に堆積した地層は、大変、複雑である。すなわち、砂と河原石、黒色土層が幾重にも重なっていたが、それは住居跡ができた後に、何度も地層の変化があったところから生じた結果である。その過程で、住居跡の輪郭と底面の一部分が破壊された。住居跡の長さは西北壁で七メートル、東北壁で一〇メートル、深さ三〇センチ以上である。ところで、北側の角から西北壁の間の住居跡の外に、二平方メートルの範囲内に、住居跡の底面から出てくる炭のような火に焼けた木材が残っていた。そこは、住居跡の底面から二〇センチ上まで階段式に堅くしており、おそらく住居跡の出入口であろう。住居跡の底面では二カ所で、直径四〇×六〇センチ程度の丸味のある穴に灰がつまっている。ともに炉跡のようである。住居跡の全面で木材が焼けて炭となって出土した。現存していた炭の状態からみて、やはり切妻形の屋根であろう。栗の藁のようなものが焼けたものと、底面に敷かれたごさの焼けたものも出たが、その上には火に焼けた骨がおかれていた。住居跡のところどころに、厚さ一センチほどの灰色粘土層があることからみて、底面を固めたことがうかがえる。住居跡の東北壁の中間からは、火に焼けた木の間から、柱状抉入石斧が出土し、また、西側の隅からは完形の無文土器が紡錘車とともに出土した。そのほかに、石剣、石庖丁、すりうすの下石、砥石などが出た。

以上のように、住居跡群は、一般的に柱を底面の上にそのまま立て、屋根の形態は切妻で、炉跡はほとんどない。炉跡は、ただ二基の住居跡でみつかったが、特別の施設はない。遺物は、全般に少なかった。そして、一〇余基の住居跡のなかで、四基だけは火を受けていなかった。

ところで、問題の無文土器は、胎土によって二種類に大別される。第一は、いわゆる褐色あるいは赤褐色の無文土器である。胎土に砂粒を多く混じえ、ときには滑石も少し含むものがある。器表面が比較的粗い。まず、壺では、表面採集遺物のなかに、高さ一〇センチほどの直立する頸部をもったものがある(第一一図1)。甕では、まっすぐ終った口縁端のすぐ下に有孔列点文をめぐらした唯一の完形品があり、一〇号住居跡から出土している(第一一図4)。

第11図 永興邑遺跡出土の無文土器（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）

のもの（第二一図5）と、口唇形のもの（第二一図6）とがある。

表面採集遺物であるが、碗もある。口径一四センチ、底径一一センチ、器高九・五センチ、器壁の厚さ一センチ未満の小形のものである（第二一図8）。

台付鉢は、一〇号住居跡の堆積層から出ており、胎土に細砂粒を含んでいる。これは、表面採集遺物のなかにもみられる（第二一図9）。

第二は、黒色土器である。胎土に泥土を混じえ、薄い器壁は比較的堅い。発見された土器はいずれも小破片である

これには、胴部の上の部分に乳首形把手が一对ついている。把手の下はぐっと狭ばまり、平底の底部へとつづく。口径二〇センチ、器高二二センチ、底径一〇センチ、器壁の厚さ〇・六センチを測る。四号住居跡から出土した別の一例では、口縁端を外方に折りまげずに、まっすぐ終るものであって、縁端に斜行する刻み目文をまばらにつけている（第二一図2）。表面採集遺物のなかに、口縁端を外方に折りまげて二重口縁としたものと、さらにその上に円孔を穿つもの（第二一図3）とがある。底部は上記の完形品と同じ形態のものが多く、なかには底部の厚さが三センチを越える厚いものもある。表面採集遺物のなかの、厚手で高台状になったもの（第二一図7）は珍しい。表面採集された把手には、乳首形

ため、全体の器形はわからないが、おそらく壺であろう。四号住居跡から出土した破片には、横方向に数条の平行線をめぐらしている（第一一図10）。同じく他の一点は、○・四センチの間隔を置いて二条の平行線を横に引き、そのなかに斜格子文を描いて網文様風につくっている（第一一図11）。一〇号住居跡の堆積層から出た一点は、胎土は同じであるが、形態は少し異なる。すなわち、口縁のすぐ下に貫通孔があり、それを間において、上・下に二条の平行線を横に引いてから、そのなかに、円孔の左側には平行斜線を、また、右側にはチグザグ文を描いた。この文様帯の下方には把手の痕跡があるが、おそらく乳首形把手のようである。器壁の厚さは○・五センチと薄い（第一一図12）。

(5) 咸鏡南道洪原郡雲浦労働者区遺跡出土の無文土器

雲浦遺跡は、一九五八年一二月ごろ、貯水池堰堤工事に伴う石材の採石場で、遺跡が発見されたという通報を受けて、現地調査が行なわれた。遺物はすでに一部が取り出された後であったが、部分的な試掘も含めて調査された。

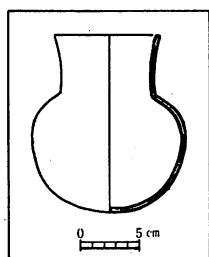
遺跡は、咸鏡線雲浦駅から北側に約一キロの地点にあり、安豊里集落の背後の山の麓に位置する。低丘陵上の陽当りのよい場所にあり、背後には比較的傾斜が急な山が連なり、前方にはハンポ川という小川とわずかな野原が広がっている。ここから東方に峠を一つ越えて、およそ四キロほど行くと、新豊里の集落があり、そこにはテーブル型の支石墓が一基立っている。

遺跡は、石積みを掘りかえして遺物層を発見するにいたったものである。石積みは、厚さ一メートルほどの層で、およそ幅五メートル、長さ三〇メートルの広さで山の麓に平坦に伸びているが、山の上から押し出されて、自然に堆積した場所でもあるようである。石の大きさは、拳大のものが多く、人頭大のものもある。

遺物は、大体、地表から五〇センチ下がったところで、腐蝕土が若干混じった砂利層で検出されたが、砂利層では、規則的に積んだ痕跡をみいだすことはできず、表面もやはり起伏がなく平坦で、自然である。

出土遺物は、青銅製剣把頭飾一点と、粘板岩製紡錘車一点、そして、土器破片多数に、人骨一〇余体分であった。

出土状況をみると、砂利層の最初から剣把頭飾と紡錘車が一カ所でみられ、そこから二メートルほど離れたところで、破損した土器片多数と、四、五体分の人骨が無秩序にみられた。人骨がどのように横たえられていたか、その状態はわからず、人骨片と土器片は、多くのものが石積みにまぎれこんでいた。人骨付近には、何ら施設物の痕跡はみいだせなかった。ある試掘地点では、人骨一体分とその頭蓋骨の側に、黒色土器一点が下に接した状態で発見されたが、その土器のなかには歯が三個入っていた。このことは、土器が頭の脇におかれていたようであるが、遺体が置かれた方向ははっきりしなかった。このほかにも、多くの地点で、人骨と土器片が同じ状態で発見された。推測するに、砂利層を少し掘りかえして、遺体を横たえ、そこに副葬品を入れ、石でもって覆ったらしい。ところが、このように攪乱状態にあったのは、砂利層に押しつぶされたためで、原位置がわからなくなったようである。このような墳墓と推定される遺構は、朝鮮半島でこれまでにほとんど知られていない。おそらく、これは原始的な積石塚の一種と考えられ、この遺跡は、共同墓地とみられよう。



第12図 雲浦出土の無文土器（縮尺1/4）

さて、雲浦遺跡で出土した無文土器は、赤黒くて、厚手の、無文様の平底土器が多いが、そのなかには、底部が平坦と台状になったものと、そうでないものがある。また、薄手の丹塗磨研土器もみられる。土器はいずれもほとんどが破片であるため、形態や大きさは正確にわからないが、厚手の無文土器には鉢、丹塗磨研土器には碗のようなものがあるらしい。前者には、口縁部を植木鉢のように二重に折りまげたものがあるが、底部はわからない。

形態がわかるものでは、黒色磨研土器がある。復元された結果によると、直径一三センチ、高さ一五・五センチの丸底の壺である（第一二図）。頸部の高さが五・五センチを測り、やや長いことが特長である。やわらかい胎土で堅くない。器壁は薄くて文様はみられない。咸鏡南道で、この種の土器が発見されたのは最初である。

三 咸鏡南道無文土器の編年——結語に代えて——

咸鏡南道の無文土器は、他の地域と同じく、褐色もしくは赤褐色をした、厚手、無文のものが主流をなしている。この種の無文土器は、おそらく、無文土器時代全般にわたってみられ、したがってまた、時間の流れにつれて器形や整形・成形技法も変化したであろうことは、容易に推測できる。しかし、第二節で資料紹介を行なったとおり、かならずしも良好な資料に恵まれているとはいえない現状である。そこで、他の地域における編年観と、数少ない資料ながらも、そこにみられる器形・整形技法ならびに別種の土器との共伴関係などを参考としながら、将来のより詳細な編年作業への踏み台になれば幸いと思っている。結論からいうと、咸鏡南道の無文土器をとりあえず、第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲの様式に分けておきたい。

第Ⅰ様式は、咸鏡北道の徳仁里遺跡出土品を参考として例示しつつ、咸鏡南道における将来の発見を予測しておく。すなわち、口縁部が外反する壺と、口縁部が直立し、端部近くに有孔列点文をめぐらす、甕のセット（第三図1・2）が指標となる。甕には、江原北道中坪洞遺跡採集の突瘤文を有するものが共存してもかまわない。

第Ⅱ様式は、咸鏡南道の中里・永興邑の両遺跡出土品が好例である。いわゆる褐色あるいは赤褐色の無文土器では、壺の実態はわからない。甕では、いわゆる有孔列点文土器が引き続いて優勢であるが、器形に若干の変化がみられる。すなわち、口縁部は、わずかに内湾して終り、また、有孔列点文の下方に乳首形ないしは突起状の把手がつくことは大きな特色である。把手には、永興邑遺跡で出土した切株形および口唇形のものも含まれよう。甕には、口縁端外面に斜行する刻み目をもつものや、口縁端を外方に折りかえて二重にし、さらにそこに円孔を穿つというものがある。前者は、朝鮮半島北部の西海岸地方に特長的なものであり、後者は、朝鮮半島の東北部と西海岸地方の二つの要素が、いわば折衷されたものである。これらの甕に共伴して、小形の碗や、台付鉢が組み合わさることが注目さ

れる。第Ⅱ様式の最大の特色は、黒色磨研土器が共存することである。上記のとおり、ほとんど壺であって、いわゆる褐色あるいは赤褐色の、いつてみれば粗製土器に対して、精製土器ともいえるもので、前者の壺の欠如を補完するものであるかもしれない。黒色磨研土器は、いずれも焼成後に線刻によって、平行線のなかを三角文や斜線でうめる文様が基調となっている。

第Ⅲ様式として、咸鏡南道の雲浦遺跡出土品を挙げる。前述のとおり、厚手、無文の粗製土器鉢のほか、黒色磨研土器壺、丹塗磨研土器碗などが指摘されるが、詳細はわからない。粗製土器には二重口縁部をもつものがあるといっているので、第Ⅱ様式に引き続くものと思われる。ここでは積石塚の一種と思われる墳墓遺構がみつかり、人骨が一〇体余りと土器片も多数出土したといわれる。その場合、それらがすべて共存したものか、それとも、その間に若干の時期差があるものか、問題がないではない。ともあれ、小形の丸底壺は、もっとも新しい時期のものであろう。

以上のように、咸鏡南道の無文土器については、現段階における一応の目安として、三様式に編年してみた。しかしながら、これはあくまでも一つの試案にすぎず、残された問題点や疑問点が多い。

まず、他の地域の例から類推して、少なくとも五様式ぐらいには細分されよう。咸鏡南道における新資料の発見如何によつては、第Ⅰ様式の類例として提示した、徳仁里遺跡出土土器に先行もしくは細分できる可能性がじゅうぶんにある。第Ⅱ様式についても、永興邑遺跡の住居跡において、二号から三号を経て四号住居跡へという前後関係が指摘されているので、その間に細分される可能性がある。そうした場合、乳首形と切株形ないしは口唇形の把手の間には、時期差が生じるかもしれない。

もう一つは、各様式における器種構成の問題である。たとえば、第Ⅰ様式における丹塗磨研土器の実態と、仮りに第Ⅰ様式が細分できるとすると、その間の型式差などは、現在のところまったく不明である。第Ⅱ様式については、褐色もしくは赤褐色の、いわゆる無文土器の壺を追求しなければならない。第Ⅲ様式でも、雲浦遺跡出土の各種土器

に関連して、黒色磨研土器と共伴する、褐色もしくは赤褐色の無文土器が具体的に提示されることが望まれる。

さて、第Ⅰ様式の無文土器は、有孔列点文土器という点で、咸鏡北道の会寧五洞遺跡の第Ⅱ様式に対比され、また、南部地方の古式の様式につながっていくものであり、朝鮮半島東北部の古様式の一つの典型といえよう。

第Ⅱ様式の無文土器は、黒色磨研土器が伴ない、それらに幾何学的な線刻文様を施すなどの特色のあるものである。この種の黒色磨研土器は、近くでは咸鏡北道羅津の草島遺跡で早くから知られてきた。さらに、朝鮮半島の西北部で平安北道的美松里・細竹里両遺跡でも認められ、両地方との系譜上の関連が指摘できよう。その上で、第Ⅱ様式の黒色磨研壺の平行線文、褐色あるいは赤褐色土器における有孔列点文や乳首形把手ならびに全体的な器形などからみて、美松里Ⅱ₂型式^②および細竹里Ⅱ₂型式^②に対比されるものである。この時期には、石庖丁・柱状挟入石斧・石鏃などの磨製石器が依然として盛行しているが、おそらくすでに青銅器が製造されはじめているという注目すべき事実がある。すなわち、永興邑遺跡では、矛・斧・小銅鐸などの鑄型が表面採集もしくは発掘によって検出されている。美松里遺跡では、この時期に先行する美松里Ⅱ₁型式の段階にさかのぼる可能性のある銅斧が出土している。また、中国大陆では、遼寧省遼陽市二道河子村の第二号石室墓では、美松里Ⅱ₁型式の壺に伴って、銅斧と斧の鑄型が出土している。^②

第Ⅲ様式の無文土器は、図示できるものはほとんどなく、わずかに黒色磨研土器の壺が比較的よくわかる程度である。雲浦出土例とまったく同じものは、これまでに発見されておらず、系譜や他地域との比較はむづかしい。あえていうならば、第Ⅱ様式の黒色磨研土器の無文様化という流れのなかで理解できるのかもしれない。その土器に伴って、剣把頭飾が出土しているが、その型式は、しばしば細形銅剣に組み合わさるものであって、青銅器においても、第Ⅲ様式の段階には、一段と展開したといえよう。

〔註〕

- ① 西谷正、一九八一「考古学よりみた原始・古代社会」『新朝鮮史入門』五五～五六頁、龍溪書舍、東京。
- 西谷正、一九七五「会寧五洞の土器をめぐる問題―北部朝鮮無文土器編年のために」『史淵』第一一二輯、福岡。
- 西谷正、一九七七「細竹里の土器をめぐる問題―西部朝鮮無文土器編年のために」『考古論集』広島。
- 西谷正、一九七八「美松里洞窟出土の無文土器―西部朝鮮無文土器編年のために(2)」『史淵』第一一五輯、福岡。
- ② 安永順、一九六六「北青郡中里遺跡」『考古民俗』一九六六年第二号、ピョンヤン。
- ③ 黄基徳、一九五七「豆満江岸流域と東海岸一帯の遺跡調査」『文化遺産』一九五七年第六号、ピョンヤン。
- ④ 黄基徳、一九五七「前掲論文」。
- ⑤ 韓錫正、一九六一「咸鏡南道地域で発見された細形銅劍遺跡と遺物」『文化遺産』一九六一年第一号、ピョンヤン。
- ⑥ 韓錫正、一九六一「前掲論文」。
- ⑦ 徐国泰、一九六五「永興邑遺跡に関する報告」『考古民俗』一九六五年第二号、ピョンヤン。
- ⑧ 黄基徳、一九五七「前掲論文」。
- ⑨ 田疇福、一九六一「咸鏡北道金策郡徳仁里八支石墓ノ整理簡略報告」『文化遺産』一九六一年第三号、ピョンヤン。
- ⑩ 李長燮、一九五八「元山市中坪里原始遺跡」『文化遺産』一九五八年第六号、ピョンヤン。
- ⑪ 梁翼龍、一九六一「最近江原道で発見された原始遺物」『文化遺産』一九六一年第六号、ピョンヤン。
- ⑫ 以下の記述は、田疇福、一九六一「前掲論文」七三～七四頁による。
- ⑬ 西谷正、一九八〇「日朝原始墳墓の諸問題」『東アジアにおける日本古代史講座』第一巻、一六六～一六七頁、東京。
- ⑭ 以下の記述は、李長燮、一九五八「前掲論文」五七～五八、六〇～六一頁、および、梁翼龍、一九六一「前掲論文」三二、三五、四三頁による。
- ⑮ 以下の記述は、安永順、一九六六「前掲論文」二四～二六頁による。
- ⑯ 削土工事に従事した農民の確認したところによると、火を受けた底面に、炭と灰が混じっていた。そのなかで、土器底部三個体分、黒色土器破片数点、石斧二、石庖丁一、さらに、火を受けた骨の破片や骨錐が検出されたという（安永順、一九六六「前掲論文」二四頁）。

鉄の破片は、重さが六グラムのひじょうに小さいものであるが、龍城機械工場実験研究所で分析されたようである（安永順、

一九六六「前掲論文」二五頁。

⑬ 以下の記述は、徐国泰、一九六五「前掲論文」三五～三九、四一～四二、四五頁による。

⑭ 金政文、一九六四「細竹里遺跡発掘中間報告(1)」『考古民俗』一九六四年第二号、ピョンヤン。

⑮ 以下の記述は、韓錫正、一九六一「前掲論文」七四～七六頁による。

⑯ 西谷正、一九七八「前掲論文」一七八～一七九頁。

⑰ 西谷正、一九七七「前掲論文」四九〇～四九一頁。

⑱ 遼陽市文物管理所、一九七七「遼陽二道河子石棺墓」『考古』一九七七年第五期、北京。